ランナーたち

安部孝作

口笛を吹きながら、人工衛星が通過している。東から西へ走るために走り続けるランナーたちは、百四日目の朝を迎えていた。彼らの後ろに点在した発汗の流跡が、ぬめぬめとした影となっている。その上を忍び寄る、金属片で指を切るような痛み――そして彼らは目撃した。これが彼らの今後を全て決めた。それは予言者の言葉に裏付けられている。「赤い雲から黒い雷が下ることだろう」。夜空では確かにオリオンと蠍座の赤い粘液に満ちた抱擁が行われていた。それは全く偶然の目撃であった。

勃発した発車五秒の自動車爆発、それが汚職政治家への目覚めの挨拶だった――と同時に次々と切られるカメラのシャッター音。それはいつまでも絶えぬ喝采となった。近隣のアパートやマンションからは、次々と欠伸が漏れ出て来るのが聞こえる。欠伸は数多のあぶくとなって弾け、中に詰まった夢が湧き出て来る……。その喧騒から数十分後、日常生活を送り始めていた彼らも、パトカーや消防車が駆け付けて来たことに異常を察知したようだった。

フライパンをもったまま出て来る主婦たちは目玉焼きを焦がし、ネクタイを結びかけたサラリーマンたちは首を括り、パジャマのままの子供たちはぬいぐるみを引きずっていた。みんな扉を蹴破って飛び出したり、枠が拉げるほどに窓を開いたりして、外の様子をうかがった――が、驚きは一瞬で、誰もが平生を過ごすような表情をして拍手した。至って冷静な会話――一つのテロリズムというものへの無関心な会話――が行われていた。

「やるならもっと派手にやらなくちゃ、とんだ茶番だ」

「そうね、面白味もないわ。物騒なくらいでちょうどいいのに」

「味気ない爆発だ、気の抜けたシャンパンのようだね、全く」

「いやあ、朝から面倒だ、こんなうんざりした眼醒めは滅多にないな」

「写真に撮っておかなければ、燃え立つ朝とはまさにこのようなことを言う」

「誰が死んだのだ？　私以外の誰かということしかわからない」

「季節外れの花火かと思ったけれど、こちらのが見栄えがいいわね」

「これが芸術と言われちゃ、仕方がないわね」

誰もが寝言のようにつぶやき、いびきのように喉奥を振るわせ、事件を淡々と見守っていた。彼らは本当に眠っているかのようだった。この爆発が誰の陰謀なのかは明白であった。住民たちへの夢告げが前々から犯人を伝えていた。背中が丸まって、腰骨の溶けてしまったような陰気な男が、近頃うろついているのを誰もが目撃していもいた。その人物は草臥れて落伍仕掛けていたランナーであった。「こいつこそ犯人だ！」という叫び声。ごわごわのタオルのようになったランナーの死体を首に巻いた男が駆け回る。

そこに暗澹たる雨雲が刻々と迫ってくる――それでもランナーたちは傘一つ差さずに走

っている――彼らが走るのを止めるのは、死ぬときだけである――。そして、雷が一瞬世界の像を銀幕の宇宙へ焼き付けた瞬間、続けざまに起きた、真犯人の男の練炭自殺、それは住人たちが夢で見た男とは全く似ても似つかない、筋骨隆々で、駅前などに張り出されていた指名手配犯の男であった。彼は公認された地下組織を統括し、たびたびテロ事件を起こし、ラジオで煽動的な声明文を流し続けていた。

こうして発生したもう一つの死はじりじりと燃え小さな炎によって引き起こされた、またもや車内でのできごとであった。自動車の扉や窓の隙間から漏れ出た一酸化炭素は、三途の川を渡るための六文銭に吸着して緑青の塊となし、もはやただの不渡り手形と化してしまった――だから男はもう三途の川を渡ることはできないかと思われた。汚濁した激流の三途の川を前にして、全裸でおずおず立ちすくむ元ゲリラの姿は誰もが思い浮かべた滑稽な図であった……特に秘書たちはほくそ笑み、当然の報いだと笑い転げた。しかし、この男は嘗て競泳の選手であったため、川幅十キロ程度ならばいともやすやすと泳ぎ渡ってしまったのだった。その光景を枯れ井戸の穴から見ていた政治家の秘書たちは、口惜しげな口調で、

「あの男、首だけが泳ぎ着いていることに気が付きやしない。体は鰐に食い荒らされていると言うのに」と野次を飛ばして地団太を踏んでいた……。男の生首はその姿を反って嘲笑し、その残響が已むことないまま地獄の奥底へ転がっていった。

一方、そこに爆破された自動車を塗装していた白銀のペンキの蒸気の中から撒き散らされた鉄屑の種子が、ランナーたちや秘書たち、住民の体に寄生し始めた。鉄屑の種子は、彼らの血を吸い、肉を裂きながら鋼の蔓を伸ばし始めた……それは何千メートルも天へ向かって延び、金細工のような大輪の花を咲かせては、砂金の種を撒き散らし、七日間掛けて愈々富士山を越えて天蓋に到達した。斃れていく住民や秘書たちをよそに、それでもランナーたちは走り続け、西の果てへと蔓を伸ばせば、薄明が射している空へ沈みかけていた細月の鉤爪が「鳴り響け、鳴り響け」と蔓を掻き鳴らした。それは声もたない霊たちを目覚めさせる音色であった。ランナーたちは肉体が共鳴し、透き通るのを感じる。

その音は天蓋に幾重にも反響して大きく揺らすと、星々も位置をずらして、その調和に満ちた配置を崩した。そしてオリオンの死体が大地へ落下してきた。それは幾つもの巨大な隕石となって墜落し、摩天楼の際限なく続く地平は斑模様を描いて潰され、跳躍した大地は地層を断ち切り、大洋はポルカを踊り始めた。だがやがてポルカと呼べない程烈しい踊りとなり、大地を誘い込んだ輪舞となった。そして大海嘯によって立ち並ぶ家屋は漂流し始め、中に住んでいた人々は新天地を目指すこととなった。そこで急いで蝋燭と羅針盤を抽斗から取り出して、リビングのテーブルへ並べたてた。羅針盤の無い家は、桶に磁石を埋め込んだ発泡スチロールを浮かべた。だが波は余りに強くうねり、せめぎ合い、家々は水平を保てなかった上、地上がどの方角にあるのかもわからなかったため、羅針盤は役立たずに終わった。だが更に悪いことは、蝋燭は顛倒して家々に火を放ったことだった。

「これでは家が燃え尽きてしまう」

「ならばこの大洪水のなかを、丸太一本で漂流するのみよ」
「ところがな、漂流したところで、それは火の海の中さ。ああ、燃えつきてしまう」
その豪火と巨浪は、森閑たる夜中に、眠りこけていた巨人たち、プロディナングの国をも襲った。巨人たちは、掌の大きさでも人間の身長以上にあり、首は細く、顔は漬物石のようで、鼻梁はテトラポッドのようだった。そこへ洪水が押しては寄せ、寄せては返し、やってくる。……。樹齢数千年の老木をなぎ倒し、ラフレシアよりも大きく香りの強い花々は根こそぎにされていった。やがてじわじわと押し寄せる水位が巨人の口や鼻をも覆い始め、愈々溺死する者が現れる。だが誰かの死が一万もの雷を落としたような咆哮を伴い、それによって誰かを目覚めさせ、目覚めた者はその驚きで心臓を破れさせて死に、その死がまた誰かを死の眼醒めへ誘うと言う連鎖が起き始めた。それいいことに黒い森から絶叫する烏が大挙して押し寄せたが、そこへ巨大な口を開いて待ち受けていた龍が、鰯を丸呑みする鯨のように平らげてしまった。
そうして古来鳥葬の伝統を保ち続けていた巨人たちは、火葬と水葬に同時に見舞われることとなり、生き残った――彼らが立ち上がれば、辛うじて顔は水面より出るため――親族たちは、ただ黙って、泣くことしかできなかった。そんな巨人たちの悲しみをよそにランナーたちはその流木を飛び跳ねて渡り、依然――いや、より速度をあげて――走り続けた。鉄の蔓はもう彼らの頭部ごと流れ去っていってしまっていたが、彼らは時折誰かの頭が流れているとそれを拾いあげ、自分のものとしてしまっていた。中には巨人の頸を着けてしまい、その重さに耐えられず溺れ死ぬランナーもいた。
やがて體半分焼け残ったまま山積みにされた巨人たちの尸の許に、人間の保健局から職員がやってきた。そして悲嘆にくれる親族に、百ページにもわたる書面を渡した。
「ここにある通り執行することは決まっている」
「こんなにも分厚い文書を読むことを、今の私たちに強いるのですか？」
「読む必要はない。これは決定事項であって、合意事項ではないからだ」
「ならば、わたしたちは自分たちの言葉を憎む、そしてお前たちの沈黙を憎む」
「巨人の声は馬鹿にでかい。耳が痛くて壊れてしまいそうだ」
その書面には衛生上、鳥葬を行うのは問題があるという事を理由に、強制的に火葬を執行すると書かれていた。何も知らない巨人族は鳥葬のため、洪水で荒地となった野に死体を並べ、烏を呼ぶための標を立て始めた。そのためには保健局は、弔いのために一万三千人の僧侶を全国からかき集めた。だが巨人族の親族たちは、ますます増す落胆し、長い溜息を一つついた。その強風に煽られた巨炎はあっという間に彼ら僧侶を丸焦げにしてしまった。これは一切が天災から招かれた偶然の悲劇であった。
しかしそれは、新聞社が一面に取り上げたことで一切の意味が変わってしまった。生き残りの住人たちに届けられた朝刊には「僧侶一万三千人、抗議の焼身自殺。仏教界からも怒りの声が」と出ている。記事の中では、この焼死事故は英雄視され、政治家たちは糾弾された。その光景を収めた写真は、大量のポスターとなって印刷され、町中の意壁に張り

だされた。ランナーたちの走り抜ける街路に吹き散らされた地下出版された記事はこう総括する。「なんせすべては、一人の政治家の汚職事件と、その暗殺計画が発端だったのである。」住民たちの憤懣は、記事に煽動されたうえ、徴税人への差別意識と相まって、抗議活動へと発展したのだった。

その時に動いた巨額の金銭は、実際のところ企業団体が自社の社員たちから吸い上げた脂肪の塊――社員たちは長年のオフィスワークで、医師にメタボリック・シンドロームと診断されていた――を、肉饅頭にして売り出した利益によって得られたものだった。少し時間を遡ると、この肉饅頭はパリスナンヤという薬品名めいた名前で売り出され、コンビニ店頭でも並んだが、倫理的問題を市民団体に問われたためすぐに販売中止になった。とはいえ、そもそもその味の臭みから一般に食されることはなく膨大な在庫が企業団体の経営を苦しめていた。そんな中、絶え間なく印刷された政治家たちの協定文書で、貧困国へ安価で輸出されることが決まった。それよる利潤が今回発覚した賄賂であった。

ところが政治家の一人B氏は、ある時抑えられない欲動に突き動かされ、この不味いと評判のパリスナンヤを夜中に一人隠れて冷蔵庫の前で貪り食ってしまった。その勢いたるやすさまじく、満腹になっても食欲が抑えられない――その酷い味にもかかわらず――で食べ続け、吐き気を催し、それでも食べ続けたため、吐瀉物が気管へ逆流して取れこんでしまった。冷たい姿で発見されたのは一週間後の正午のことだった。その顔は空腹に苦しんでいるようだったが、原形を保ち大理石像のように白くなっていた。

そしてその政治家の葬列式でのこと。歩みを止めないランナーたちも薔薇の花を手向けて過ぎさろうとしたが、丁度その時棺桶の中から「今は何時だ?」と声がした。と同時に、釘打ちされた蓋をどんどん叩く音がする。驚いた教父や親族は慌てて棺桶を叩き割った。瞬間、政次官は「眩しい!」と叫んで跳ね起きた。このことは翌朝の新聞でも報道され、一部では「タブーを犯した奇跡だ」とか「票集めのペテンだ」と騒がれたが、ひと月もすれば科学雑誌にパリスナンヤの不死効果についての論文が掲載された。とはいえ、この論文も発表されるや否や注目の的となる一方で、この科学史的に脈絡ない発見には大きな懐疑が寄せられた。不死というものがそもそもあり得るのか、死生観を巡って生物学者から宗教学者、引いてはテレビの前の主婦までもが考えるようになった。だが復活したB氏は取材を受けていった。「この世には二種類の人間がいる。理解してもらえない人間と、理解させる人間だ」そんなスローガンを掲げ、彼らは自分たちの「理解」を真理と決め込んでいた。B氏は自分がよみがえったのはパリスナンヤを食べたことが原因だったと信じて疑わなかった。

そのB氏の一言の影響は大きかった。冷凍庫の中で眠っていた大量在庫のパリスナンヤは注文が殺到し、巨大貨物船に積もうと並べられていたコンテナは再びトラックに乗せられ全国を流通した。

「生命保険会社が倒産したよ。他にもその影響で経済は壊滅状態かな」

「経済のことなんて考えるなんて偉いことだね。死生観の一つも片付かないのに」

「両方とも今に消え去る議論だよ。そんなことで頭を使うのは、愚人か貧民のすることだ」
「いいじゃないか、どうせ生きていられんだ。何もしないには十分な時間が、何かするのは長すぎる時間があるんだ」
こうしてアメリカや日本、ユーロ圏の国がパリスナンヤを一斉に買い占め始めた。輸出制限もなされ、貧困国はまたもやもとの貧困へ陥ってしまった。不死の評判が高まったパリスナンヤは美食家の間でも評判となり、珍味としてもてはやされた。そうした不死となった人びとは、自らをパリスナンヤ族と名乗り、国連から勧告が入ったことをきっかけに連合を組み始めた。共同戦線を組むための協議も空虚執り行われ、核ミサイルのボタンが押されかもしれないと危ぶまれた。どうせ核のあとに残るのはパリスナンヤ族だけだった。
不死である彼らは最早怖いものなどなく、一切を無視と決め込んでいた。そんな厚顔な様を曝しているうち、不死の効果とは裏腹に、パリスナンヤは老化を急激に早めることが発覚した。それは研究などという過程を経なくとも、先ほどまで傲慢に不死を誇っていた彼ら自身を見れば一目でわかることだった。パリスナンヤ族は数日に間にすっかり老いさばらえて、硬くなった角質の塊が這いまわるように移動するのが特徴となった。その脇をランナーたちは颯爽と駆け抜けた。ところが巨大なゾウムシのような彼らは誤った情報に騙されたと一転して苦情を寄せ始め、自国の産業を破壊しにかかった。彼らはのろのろとした動きしかできなかったが、その動きを抑える軍隊ものろのろ動いていたため、その争いは一時間経っても、血一滴流れることなかった。そこに絶好の契機と思った貧困国が、抗議活動を越境させ始めた。
そしてパリスナンヤ族たちの議会堂へ大量の火炎瓶が投げ込まれた。そして天が朱色に染まるほど燦々と燃え輝いた時、核でさえ生き残ると信じて疑わなかったパリスナンヤ族の肉体は瞬く間に蒸発して、陰影は残像となってコンクリートの壁面に残され、そのコンクリートは溶岩のようにどろどろ溶けてしまったので、ありとあらゆる影だけの存在は大地に沈み込んでしまった。抗議スローガンであった「人類は生命を取り返せ」という言葉も人間と一緒に溶けてしまった。燃え盛る焔は核の冬よりもあらゆるものを消し去ってしまった。
もはや誰もいなくなった荒地が広がるばかりだった。そこに干潟一つから掘り起こされた全ての貝が用いられた螺鈿細工の過剰装飾で批判を浴びながらも、かつて栄華を誇った宮殿を再利用した議会堂は、廃墟となっても崩れたりせず、堂々と建ったままであった。そしてその宮殿の庭園を閉ざしている、鮮やかで貪婪に光を咥える茨の巻きついた鉄門には言葉が刻まれている。
「あなたは、わたしであって、彼であり、あれであり、それである」
流麗な書体で刻まれたこの言葉は、時代錯誤な豪勢さを誇る庭園への製作者の密やかな反抗であった。この庭園のあるじはまさに、誰でもあり、突き詰めていえば庭園自身だったのだ。この支配の塊は水彩的に鮮やかな花々に満ちている。馥郁な風吹く中、一連の事件を目撃してきたランナーたちは依然走り続けていた。彼らはどうしてもこの門を通らな

ければならなかった――そして足踏みをする……。ランナーたちは最早居なくなったあるじでもなければ、誰かも解らぬ彼でもなかった。困惑していたランナーたちの許へ、続けざまに骨張った年寄りの門衛が槍を突きつけ問い質す、

「お前は私でなかったら誰なのか」

しかしランナーたちには答えは必要なかった。その門衛は苔が生え喜びの醜さに吐き気を催す、美形の顔をした天使だった。ただ彼が美形の天使であるには歳を取り過ぎており、醜悪な悪魔になるにはまだまだ若すぎたのだった。彼は遊ぶことすら知らないまま歳をとってしまい、一つたりとも賢くなることもないまま詐欺師を続けていたため、恥じ入って乾いた黄砂となって消え去った。

その黄砂を、何の遠慮もなく足跡を残して西に向かって通り過ぎていくランナーたちはまたも目撃することになった。というのも、これらの事件に関する際限ない捜査を続け、更には厖大な書類を描き上げなければならないことに嫌気がさした警官たちが、警察署から逃亡した後ネットカフェで服毒自殺を図ったのだった。ランナーたちはその警官がパトカーで逃走しているのを追尾するように走ったが、パトカーは途中のネットカフェに一斉に止まったのだった。彼らは個室の中に籠ると、最後の一服をふかし、腰に差した銃を用いるわけでもなく毒をビールに溶かして呷ったのだった。だが、自殺した彼らは自分たちの四肢を手持ちのナイフで切断し、その断面図から新たな牧場の設計図を描きだした。それは血染めの設計図であった。その遺言のような設計図は、密閉パックに収められた状態で警察署に沢山届けられた同情の感涙によって滲んでしまったものの、なんとか実現させようと言う喧伝活動が行われるようになった。

「設計図の公開を至急要請する」

「警官の命は無駄ではなかったことを明かして見せる」

「警官は命を失った後に四肢を喪わざるを得なかった。その苦しみに思いを」

活動は激化し、ゲリラ活動で警官隊と衝突することさえあったが、それでも何千万もの署名が提出されたために、国は応えざるを得なくなり、全国のゴルフ場やスキー場に閉鎖するよう通告がなされた。牧場の造営が実施される日にいたって、ブルドーザーは問答無用に丁寧に整えられた芝生や人工雪を潰してしまった。ランナーたちはブルドーザーより速く走ったので命からがら逃げおおせたのだが、何も知らずに遊興していた人びとや野生動物を轢き殺し、掻き集めた人頭や猪の頭、狐の同体、そしてそこに混在していたドングリの実を、トラックに積んでもちだしてしまった。そのためドングリの実を喪い、冬籠りの栗鼠が餓死していく中、その死骸に集った狐たちのゾンビ――狐たちは自身の神通力で何とか蘇ることには成功したのだ。それは蓬の葉一枚あれば事足りる簡単な霊術だった――の毛から振り落とされた蛆虫が、栗鼠の死肉を喰らい尽くし、賦課するなり大量の銀蠅が湧き出した。

その塊たるや一つの街を影に収めるほどの大きさであった。肉体の大きさを誇っていた入道雲も、自らの小ささに恥じいり、思い立ったように雨となって消えてしまうほどであ

る。そしてその巨大な蠅の球体は互いの摩擦で高熱を生みだし、自らの身を焼き焦がしながら発光し始めたため、ベテルギウスよりも明るい巨星となって霊峰の剱先に鎮座した。突如示現した原始の神と思われたその球体は、山猿たちが崇めたてまつり、ボス猿は司祭の如く振る舞いをして、真実の姿を一目見ようと直視したために失明した。だが同時に体験したことないような鳥肌が立ち、そのまま禿げあがった赤裸が巨大なイボだらけになってしまった。そして見えなくなった眼の奥で見つけ出した脳内を浮遊する気球団に、歯茎を剥き出しにして怒りを露わにした。これこそ神のお告げであると猿たちは一斉に歯茎をむき出しにして、喚き始めた。

　すると山麓は瞬く間に肉色に染まった――それは満開の桜が埋め尽くすが如き光景であった。生き延びた住民の多くは、黒い森が肉色の花で満ちたことに目を疑った。だがランナーたちは見惚れて立ち止まることはしない。一瞥ですべてを見て取ったのだった。通過中衛星カメラはその彼らの様子を中継し、何もかも失って退屈し切っていた人びとは、テレビの前に座り、その姿に感涙をこぼしていた。だが百六日目を迎えた早朝のランナーはこれらの騒動を、夜が明け切る前に全て目撃したのだった。彼らの中で流れる時間は、彼らの走る早さに従って多少のずれがあるようだった。そして冬風に鳥肌を立て、白い息が一瞬で凍りつくと、氷雫となって幾重にも重なり、彼らの足跡に突き立てられる氷柱になっていく様に気を取られつつも、寝ぼけ眼から垂れる涙に全て忘れてしまった。

〈了〉（原稿用紙二十三枚）